

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：13401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06237

研究課題名(和文) ディスコース分析を通じた子どもの心理援助における社会文化的文脈の理論化および検証

研究課題名(英文) Theorization and verification of socio-cultural contexts in psychological support for children using discourse analysis

研究代表者

綾城 初穂 (Ayashiro, Hatsuho)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(教員養成・院)・講師

研究者番号：60755213

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：価値観が多様化し、社会変動の大きい現代日本において、子どもの心理援助は社会文化的文脈(ディスコース)を含めて検討される必要がある。そこで本研究では子どもの心理援助の過程を、ディスコース分析、特にポジショニング理論の枠組みから検討し、理論化することを試みた。その結果、a) 子どもが苦しむディスコースに対してセラピストが取るポジショニング(あるディスコースに対して取る立ち位置)が子どものポジショニングも変化させること、b) この過程を通して、子どもは多様なディスコースを利用するようになっていくこと、c) このディスコースの多様化が子どもの心理的回復につながること、の3点が大きく示された。

研究成果の概要(英文)：There have been increases in different values and social change in Japan. When helping children using psychological approaches, we have to pay attention to socio-cultural contexts (discourses). The purpose of this study was to theorize and verify processes of psychological support for children (mainly play therapy) in terms of a discursive perspective using discourse analysis and positioning theory. We found three points as follows: A) a therapist's positioning toward a discourse which a child suffered from can change the child's positioning. B) Children can use various discourses through the processes. C) Various discourses can lead to children's recovery.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ディスコース分析 子どもの心理援助 ポジショニング理論

## 1. 研究開始当初の背景

子どもの心理には、認知・発達段階といった個人的資質や、家族・友人といった対人関係だけではなく、社会規範や文化的背景といった社会文化的文脈も影響する。例えば自らを“落ちこぼれ”“異常”などに見なす場合、その子どもは「勉強できることが良い」「痩せていることが美しい」といった広く一般に共有されている価値観から自分を判断している可能性がある。そのため、子どもへの心理援助は、そこに影響する社会文化的文脈も含めて検討していく必要がある。特に、価値観が多様化し、子どもを取り巻く社会情勢が大きく変動する現代日本において、そうした心理援助を検討することは不可欠である。

しかしながら、これまで日本の臨床心理学研究では、主にクライアントの精神内部（認知・無意識・自己など）が分析の焦点とされてきた。こうした視点は有用である一方で、クライアントの問題を個人要因から理解する傾向が強いため、社会文化的文脈を見落としてしまう危険性がある。そこで近年、欧米圏を中心に行われているディスコース分析を用いた臨床心理学研究は、従来のような精神内部に着目する方法論を批判し、社会文化的な枠組みであるディスコースという視点から援助過程を検討している。

申請者のこれまでの研究を含め（綾城, 2015, 2014, 2013, 2012）、ディスコース分析を用いた臨床心理学研究からは、クライアントの問題に社会文化的文脈が関係していることや、新たな社会文化的文脈を参照することがクライアントの問題解決につながるということが明らかとなってきている。

しかし、そうした先行研究の主な検討対象は成人の言語面接であり、子どもの心理援助の過程についてはほとんど検討されていない。そのため、子どもの問題や援助過程において、どのような社会文化的文脈が関連しているかは分かっていない。心理的問題やその援助に関連する多様な社会文化的文脈を明らかにし、子どもの援助に資する知見を得るためには、援助過程をディスコース分析によって丁寧に検討し、さらに、見出された知見を帰納的に統合していく研究を行う必要がある。

加えて日本では、ディスコースの視点は臨床心理学領域にほとんど導入されておらず、我が国における心理援助・臨床心理学研究の発展においても、本研究を行う意義がある。

## 2. 研究の目的

以上のことから、本研究では、子どもの心理援助過程をディスコース分析によって検討し、クライアントである子どもにどのような社会文化的文脈が影響しており、また援助の進展によってそれがどのように変化するかを理論的に説明することを目的とする。

なお、心理援助には多様な方法があるため、

研究では分析の焦点を拡散させないように援助方法を限定する必要がある。そこで本研究では、子どもの心理援助への有用性が実証的に示されており、日本において子どもに適用される主要な心理援助でもあるプレイセラピーの過程を検討する。

## 3. 研究の方法

### (1) ディスコース分析およびポジショニング理論による心理援助過程の分析検討

下記 について、ディスコース分析およびポジショニング理論の視点から、主に録音記録に基づいた会話分析のアプローチによって検討を行った。なお、以下二つの研究目的においては、方法論の確認が主となるため、子どもではなく、これまでの先行研究でも扱われてきた成人の心理援助の終結事例を分析対象とした。

ポジショニング理論の視点による分析：本研究においては、いくつかのディスコース分析のアプローチの中でも、特にポジショニング理論を枠組みとして採用した。これは、本理論がディスコース上の個人の位置づけ（ポジショニング）を分析するための枠組みを提示したものであるため、心理援助場面の分析に適していると考えられたためである。ただし、諸外国ではディスコース分析を用いた臨床心理学研究は進んできているものの、ポジショニング理論を用いた検討はまだほとんど行われていない。そのため、本理論による心理分析が妥当であるか、またどのような意義があるかの検討も含め、ポジショニング理論を分析枠組みとして用いて、心理援助の過程を分析した。

援助者に着目したディスコース分析的臨床心理学研究：ディスコース分析による臨床心理学研究では、援助者側の働きかけに関する先行研究が少ないことが指摘されている。しかし子どもの心理援助を考えていく上では、援助者の関わりを無視することはできない。そこで、ディスコース分析によって援助者のあり方がどのように検討できるかという点を明らかにするため、心理援助の過程を分析した。

### (2) ディスコース分析およびポジショニング理論を用いた子どもの心理援助（プレイセラピー）過程の検討

子どもの心理援助の過程について、ディスコース分析およびポジショニング理論の視点から、複数の事例を分析した。それぞれ個別の事例について事例研究に基づく検討を行った。ただし、最終的に複数の分析結果を帰納的に統合する目的があったことから、全ての分析において、クライアントのポジショニングの変遷、および、セラピスト・クライアント間のポジショニングの動きについて質的にカテゴリー化していく手法を統一して採用した。

また、ポジショニングの変遷をより明確にするために、いくつかの事例においては、CIがセラピー内で取るポジショニングを量的に換算して図示化した。

#### (3) ディスコースの視点を活用した学校における子どもの心理援助方法の検討

ディスコースの視点を子どもの心理援助に応用していくための基礎資料、および、ディスコースの視点の普及のための資料として、ディスコースの視点を学校現場に応用するアプローチを提唱した Winslade, J. & Williams, M. の『Safe and Peaceful Schools: Addressing conflict and eliminating violence』を翻訳・検討した。

### 4. 研究成果

#### (1) ディスコース分析およびポジショニング理論による心理援助過程の分析検討

ポジショニング理論の視点による分析  
本研究では、相談事例において支配的ディスコース(クライアントを苦しめる社会文化的文脈)が脱構築される過程をポジショニング理論によって検討した。ひきこもり・ニートの息子を持つ60代の女性クライアントの面接過程の録音記録を逐語化して検討した結果、クライアントが息子および自分自身に対して行うポジショニングが、欠損ディスコース(Gergen, 1994)を始めとした幾つかの支配的なディスコースによって影響を受けていること、そして、そうした支配的ディスコースが自虐ユーモアによって脱構築されることが見出された。これは、自虐ユーモアという皮肉な自己ポジショニングが社会に埋め込まれている支配的ディスコースを白日の下にさらし、社会によって構築される自己のあり方を打破するためだと考えられ、特にそれが日本社会において有効であることが議論された。本研究によって、ポジショニング理論が社会文化的背景とクライアントの関係を検討する上で有益であることが示された。

#### 援助者に着目したディスコース分析的臨床心理学研究

本研究では、心理面接の場面において、援助者がどのようにクライアントと関わっているのかについて、30代男性クライアントの心理面接を元に検討した。実際の録音記録についてディスコース分析を通して検討した結果、援助者が要約や解釈の形で支配的ディスコースを再生産していることが具体的に明らかとなった。また、再生産された支配的ディスコースが、クライアントの主体性の否定につながり、結果としてクライアントに自身の苦しみを過小評価させていた可能性も示された。結果についての考察から、ディスコース分析が、特に援助者の省察的实践(Schön, 1983)に意義があ

るということを示すことができた。

#### (2) ディスコース分析およびポジショニング理論を用いた子どもの心理援助(プレイセラピー)過程の検討

子どもの心理援助の過程について、ディスコース分析およびポジショニング理論の視点から5事例が検討された。これら複数事例の検討によって、a) 子どもが苦しむディスコースに対してセラピストが取るポジショニングが子どものポジショニングも変化させること、b) この過程を通して、子どもは多様なディスコースを利用するようになっていくこと、c) こうしたディスコースの多様化が子どもの心理的回復につながっていることの3点が大きく示された。

以下、個々の事例についての分析結果を提示する。

事例A: 受動的であったクライアントA(援助開始時7歳女児)の38回のプレイセラピーを検討した。分析の結果、4つのポジション(従属者、主導者、挑戦者、協働者)が援助の経過とともに展開し、並行してAは積極的に協働的な関係を結ぶ新たな対人関係の文脈を得られていたことが見出された。さらに援助者についての分析を通して、援助者が自身のポジションをAのポジションと呼応する形で変化させたことが、Aの肯定的な変化に有益に働いたことが示された。

事例B: 他者との対人関係構築が苦手とされたクライアントB(援助開始時10歳男児)の57回のプレイセラピーを検討した。分析の結果、4つのポジション(クリエイター、教師、プレイヤー、クライアント)が援助の経過とともに展開し、並行してBが援助者や友人と良好な関係を結ぶことができるようになっていたことが見出された(ポジションの変遷については下記の図1のように数量化された)。また、援助者についての分析によって、肯定的な雰囲気醸成と、「楽しい」というディスコースの構築が、Bの変化に寄与したことが示された。

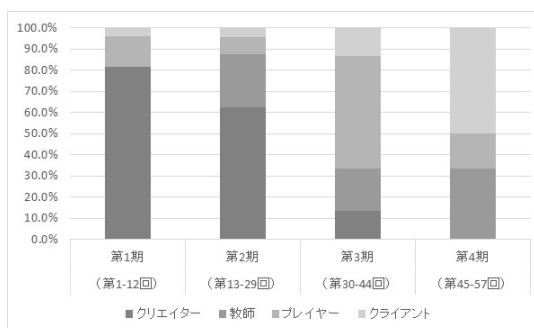


図1 事例Bのポジションの変遷

事例C: 頭痛と嘔吐を主訴として不登校となったクライアントC(援助開始時9歳男児)の89回のプレイセラピーを検討した。分析

の結果、4つのポジション（強者、建築者、守護者、プレイヤー）が援助の経過とともに展開した（図2も参照）。最終時には、Cの主訴および不登校は消失していた。本結果から、プレイセラピー内で支配的なディスコースが脱構築され、プレイセラピー内でクライアントの行為主体性を高めるディスコースへとポジションを移せたことが、クライアントの回復につながったと推察された。

事例D：落ち着きがない、怒りやすい、勉強に集中できないといった主訴で相談機関に来室したクライアントD（援助開始時7歳男児）の39回のプレイセラピーを検討した。分析の結果、5つのポジション（チャレンジャー、コントローラー、気まぐれ屋、戦闘員、労働者）が援助の経過とともに展開した（図3も参照）。最終時には、Dの主訴は消失しており、学習も教科によっては一位を取るほどの意欲を持つようになっていた。本結果からは、プレイセラピーによって、必ずしも問題のあるディスコースが問題の無いディスコースへと移行しなくとも、多様なディスコースが展開していくことができれば、それがクライアントの回復につながるということが示された。

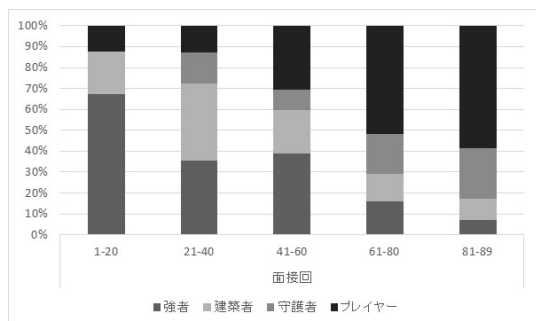


図2 事例Cのポジションの変遷

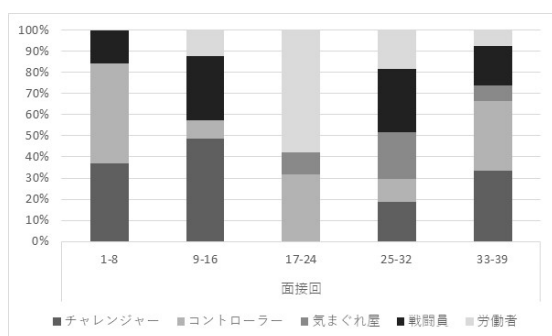


図3 事例Dのポジションの変遷

事例E：アスペルガー症候群と診断されたクライアントD（援助開始時12歳男児）の97回のプレイセラピーを検討した。本研究では特に「診断」によってクライアントがどのようなポジショニングに至るかを分析した。その結果、4つのポジション（欠落者、患者、

異常者、有能者）が見出された。この分析から、アスペルガー症候群という診断はある種のブラックボックスとなり、クライアントに自分について表明できる権利を与えると同時に、自分ではアスペルガー症候群に対処できないという無力感や自分が異常であるという否定的なラベリングといった、弱体化 (Gergen, 1994) が生じることが明らかとなった。

(3) ディスコースの視点を活用した学校における子どもの心理援助方法の検討

『Safe and Peaceful Schools: Addressing conflict and eliminating violence』の執筆者である Winslade, J 教授 (カリフォルニア州立大学サンバーナーディーノ校) と Williams, M 氏 (ニュージーランド・エッジウォーターカレッジ) と面会およびメールでの打ち合わせを行いながら、研究代表者が英文を日本語に翻訳した。また、後書きとして、ディスコースの視点に基づいたアプローチの解説と日本での応用可能性について、研究代表者によるまとめも執筆し、ディスコースの視点の普及もはかった。

翻訳は『いじめ・暴力に向き合う学校づくり：対立を修復し、学びに変えるナラティブ・アプローチ』として新曜社から出版された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

Ayashiro, H. (2016). Reproducing dominant discourses for therapy: Discourse analysis of a Japanese client's therapy. *Journal of Systemic Therapies*, 35(1), 37-51. (査読有)

綾城初穂 (2016). 対人関係構築が難しい子どもをどう援助するか—ディスコース分析的事例研究を通じた学びとしての心理支援の検討— *教師教育研究*, 9, 207-220. (査読無)

Ayashiro, H. (2015). Deconstructing dominant discourse using self-deprecating humor: A discourse analysis of a consulting with Japanese female about hikikomori and NEET. *Wisdom in Education*, 5(2).

<http://scholarworks.lib.csusb.edu/wie/vol5/iss2/2> (査読有)

綾城初穂 (2015). 「受動的」な子どもをどう援助するか—ポジショニング理論による事例研究— *教師教育研究*, 8, 167-176. (査読無)

〔学会発表〕(計3件)

Ayashiro, H. & Hirano, M. (in print). How does diagnosis influence a client? A case study of a client diagnosed with Asperger

syndrome using positioning theory. Poster presented at 15th European Congress of Psychology in Amsterdam, Netherlands (ECP 2017). (査読有審査済み発表予定)  
Ayashiro, H. & Hirano, M. (2016). Play therapy and Erikson's concept of industry vs. inferiority: A case study using positioning theory. Poster presented at the 31st International Congress of Psychology in Yokohama, Japan (ICP 2016). (査読有発表)  
Ayashiro, H. & Hirano, M. (2016). Agency as resilience: A case study of play therapy with a school-age boy using positioning theory. Poster presented at 8th European Conference on Positive Psychology in Angers, France (ECPP 2016). (査読有発表)

〔図書〕(計1件)

綾城初穂 (訳) (2016). いじめ・暴力に向き合う学校づくり—対立を修復し, 学びに変えるナラティブ・アプローチ 新曜社. (Winslade J. & Williams, M. (2012). Safe and peaceful schools: Addressing conflict and eliminating violence. Thousand Oaks, CA: Corwin.)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

綾城 初穂 (AYASHIRO, Hatsuho)  
福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門・講師  
研究者番号: 60755213

(4) 研究協力者

平野 真理 (HIRANO, Mari)  
東京家政大学・人文学部・講師